

## 5 月第 1 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 5 月 5 日（日）10：30～11：30 復活節第 6 主日
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネによる福音書 16 章 25 節～33 節（新約 p201）
- 説教題：「 勇気を出しなさい 」
- 讃美歌：210 「 来る朝ごとに 朝日とともに、」  
356 「 インマヌエルの 主イエスこそ 」

ヨハネによる福音書の 16 章 25 節から 33 節を読んでいただきました。先週お話ししたことの繰り返しですが、ヨハネによる福音書の 14 章から 16 章は、主イエスが最後の晩餐において弟子たちにお語りになった告別（訣別）説教とも言われています。続く 17 章は、その説教に続く結びの祈りです。その説教はその場にいた弟子たちだけでなく、彼らの教えを聞いて主イエスを信じ、洗礼を受けて教会に連なって生きている者たちに対しても語られています、と申し上げたと思います。そういうわけで、厳密に考えれば、本日の聖書箇所は、14 章から続く主イエスの「告別（訣別）説教」の結論と言えますし、13 章から記されている主イエスと弟子たちとの最後の晩餐の場での長い話の締めくくりとも言えます。特に最後の 16 章 33 節の「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」という御言葉は、生前の主イエスの弟子たちに対する最後の力強い励ましということもできます。私がこの御言葉に最初に出会ったのは、1970 年代の初めです。後に東京神学大学の学長になられる近藤勝彦先生が、ドイツに留学されるので、先生の母教会でもあり私の母教会でもある教会で、励ましの意味も込めた送別会が開かれたときのことです。その時の礼拝で説教をなさったときに、この聖書箇所が取り上げられました。当時は口語訳聖書でしたので「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」と語られていました。

ところで、私たちが今読んでいる新共同訳聖書の訳では「あなたがたには世で苦難がある」という表現になっています。その言葉からは、ここ数年の私たちの身近なことでは、新型コロナウイルスの感染が世界中に拡がってしまい、不安や恐れに捕えられてしまったことなどを考えます。最近では次第に感染も収まりつつあり、多少は不安から解放されたようにも思いますが、コロナ禍以前の生活にはなかなか戻れないような気がします。さらには、最近頻発する地震に遭われた被災者の方々の苦しみを想像したり、今この時にも世界中で繰り返されている戦いのなかで苦しんでいる方々を思い起こした

りします。けれども、口語訳のように「あなたがたは、この世ではなやみがある。」と語りかけられると、私たちの日常の中での様々な悩みや身近な苦しみを思い起こすのではないのでしょうか。少なくとも、その説教を聞いたころの私が心に刻んだのは「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」という、私の日常生活の中に素朴に入ってくる励ましの御言葉でした。

けれども、時に小さな悩みが次第に膨れ上がって「苦難」という状況になってしまうことも、私たちが経験することです。そのような私たちにも主イエスは、「勇気を出しなさい」と語りかけておられます。それは私たちに、勇気を無理やりしぼり出して頑張りなさいと言っておられるのではありません。この言葉は、マルコによる福音書の 10 章 49 節にも「安心しなさい」と訳されて用いられています。マルコによる福音書の 10 章 46 節から 52 節には、「盲人バルティマイをいやす」という見出しがついています。エリコの町に着いた主イエスが、弟子たちや大勢の群衆と一緒にエリコを出て行こうとされたとき、バルティマイという盲人が道端に座って物乞いをしていました。聖書の中で名前が明らかに記されているのは、この出来事が後の時代に至るまで正確に語り伝えられるほどの重要なものであったということと、52 節で「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」と記されるように、彼が主イエスに従うものとしての新しい人生へと歩み出したからでしょう。ヨハネによる福音書を少し離れますが、その出来事を、私たちもまた彼と同じところに自分自身を置いて丁寧に見ていきましょう。この日も彼は、いつものように道端に座って物乞いをしていました。ところが、「ナザレのイエス」という声が聞こえました。その人はあちらこちちで病人を癒し、目の見えない人を見えるようにしたという評判を彼は聞いていたのだと思います。もしかしたら、そのナザレのイエスにさえ出会えば、自分自身の人生も変わるかもしれないと一筋の望みを抱いていたかもしれません。その方が自分の前を通って行こうとしているのです。だから、彼は主イエスに何とか自分に気づいていただきたいくて、大声で「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び始めたのでしょう。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしていました。しかし、彼はますます「ダビデの子よ、わたしを憐れんで下さい」と叫び続けたのです。主イエスはその彼の叫びを聞いて「立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた。」と 49 節には記されています。その時に、周囲の人々が主イエスの言葉を伝えようとして、盲人を呼んで言った言葉が「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」だったのです。

そして、この「安心しなさい。」という言葉は、私たちになじみのある個所で主イエスご自身によって語られています。それは、マタイによる福音書にもマルコによる福音書にも描かれている、ガリラヤ湖で逆風に悩まされている弟子たちのところに、主イエスが湖の上を歩いて近づかれたという場面です。湖の上を歩いておられる主イエスの姿を

見て、幽霊だとおびえ、恐怖のあまり叫び声をあげる弟子たちに、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」と話しかけられたのです。この場面もまた、私たちが様々な困難に直面しているときに、恐れおののいて主イエスさえも幽霊のように見えてしまうことを示しているのではないのでしょうか。そのような状況にあって、主イエスはお自分のほうから近づいてきて下さり、何よりも「安心しなさい。わたしだ。」と呼びかけてくださるのです。

そのような主イエスの呼びかけの言葉を嘔みしめながら、本日の箇所に戻しましょう。ヨハネによる福音書 16 章 33 節で、主イエスが「わたしはすでに世に勝っている。」とお語りになる時、「世」というのは、主イエスに敵対するすべての存在として描かれています。私たちが体験するあらゆる苦難、そして、自分自身の心の中に潜む小さな悩みや恐れ、そのすべてをひとまとめにして「世に勝っている」とお語りになっている主イエスの宣言を、私たちはこの礼拝において聞いているのです。神の独り子主イエスは、私たちにその宣言をされるためにこの世に来て下さいました。そして十字架の死に至るご生涯を歩み通して下さったことによって、「わたしはすでに世に勝っている」という救いを実現して下さいました。そのことを「信じない者ではなく」心から「信じる者に」なりたいと思います。